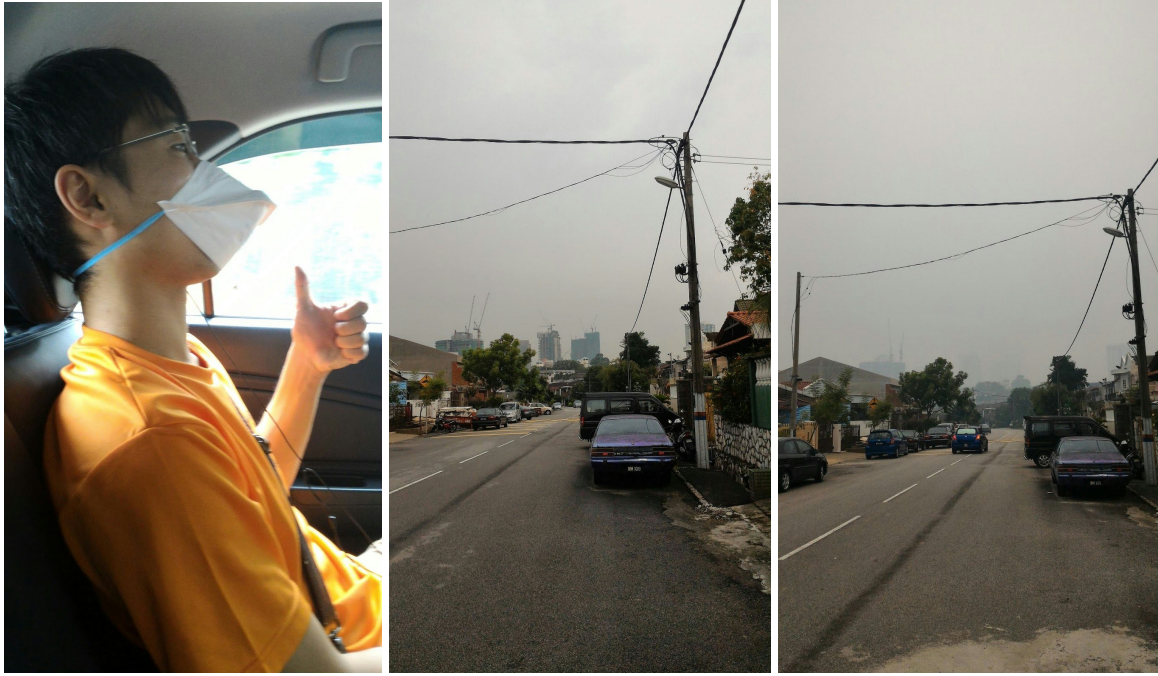


貴方は近年インドネシア及びその近隣国（マレーシア含む）で重大な都市環境問題になっている「ヘイズ」というものをご存知だろうか。恥ずかしながら自分はマレーシアを訪れるまで存在を知らなかったのだが、自らの経験と現在受講しているNINGEN-RYOKUという講義により学ぶ機会を得た。

マレーシアでは毎年6～8月頃になると白い靄のようなものが視界を覆い出し、酷い時は数キロ先のビルがその影に飲み込まれ消えてしまう。この白い靄が「ヘイズ」と呼ばれるものであり、その正体はインドネシアの森林火災により発生した微粒子が風に舞い飛散したものだ。ヘイズは各調査から人々の呼吸器官や眼へと健康被害を及ぼすことが知られており、丁度この記事を執筆している今日も大学がヘイズによる健康被害を考慮し、全講義を休講にするという処置を取っている。そこまで酷いのかとこれを読んで驚く人がいるかもしれないが、事実私自身も半年前にKLを訪れた際、あまりの酷さに3日で喉が焼けるような痛みで苛まれ、帰国するまでの1週間水を飲むことすら苦労した苦い経験がある。そういった経緯もあり、今ではマスク着用が私の習慣となっている。（愛用しているのは実用重視のダックマスクと呼ばれるアヒルの口のような形をしたマスク。因みに他の使用者を見かけた事は未だ無い。）

各政府はインドネシア政府に毎年苦情を申し立て、それに対してインドネシアも大きな反論はしないもののこれといった対策は取られていない（取れない）のが現状だ。日本の公害とヘイズの異なる点はその原因の複雑さにある。日本では公害の発生源となる工場を特定しそれを法規制する事で解決を図ったが、主体である農民に対してヘイズの一因となる焼畑を規制するというのは彼らの飯の種を取り上げる行為であり、大人しく従えるはずもない。そもそもヘイズの原因である森林火災に影響を与える主体には海外企業なども含まれていて単一ではないし、それらを生み出す背景にあるのは貧困などの社会問題にある。農民は日々の生活の為に焼畑をし、その解決費用は更に高額。それは正しく環境汚染への片道切符で、走り出したら彼ら自身には止められないからこそ問題が深刻化しているのだ。「QOLは金持ちだけが求められる。」という議論した現地学生の言葉に、「求められるのは「ただの」解決策ではなく、「利益を生み出す」解決策なのだ」と自分の考えを改める日々である。小倉



左からダックマスク、平常時風景、休校となった今日の風景の写真。